## （8）三次に残るもののけ物語

江戸時代、三次藩士であった稲生武太夫（いのうぶだゆう）が毎晩物怪に襲われる体験談をもとにまとめられた「稲生物怪録」という古書がある。稲生武太夫は幼名を平太郎と言い、三次藩が広島藩に合併される1758年まで三次に住んでいた実在の人物である。さらにこの物語の登場人物は同時代の他の歴史資料と比較してみると、いずれも当時実際に住んでいた人の名前であったことがわかり、物怪録が単なる空想話でないことが明らかになった。

登場する物怪や怪奇現象は奇想天外なものばかりで、江の川流域や広島市周辺には似たような民話や伝説は、全く見あたらない。しかも暗い陰湿な妖怪ではなく、悪気のないほほえましい悪戯っ子みたいなものばかりだ。物語の結末は、最後に物怪を操っていたという魔王が登場し、ついに降参して終わる。魔王がその時置いて行ったという「木づち」が、今でも広島市の国前寺に残されている。

**青瓢箪の怪**

居間の隅の穴から女の逆さ生首が、笑いながら飛び歩き、平太郎をなめ回し始めた。
その気持ちの悪いことといったら・・。

大きな石の妖怪。よく見ると八方に足、カニのような目がついている。がさがさと近寄ってくるが、平太郎は相手にしない。

平太郎宅に髭手の大男が現れ、平太郎をわしづかみ。大男の目から太陽のような光が。
刀で応じると姿を消した。

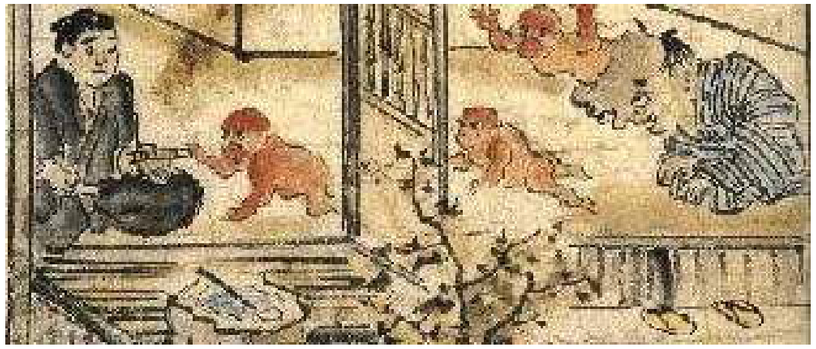
女の首が枕元に飛んできて、平太郎を見つめた。
女の首の下が手になり、平太郎の体をなでまわした

田楽みたいに串刺しになった目の丸い小坊主の首が次々と平太郎の枕元をはね　まわった。

**祈祷札の怪**

押入のなかから大きなひきがえるが現れた。腹の赤いひもを握ったまま平太郎が寝て、次の日起きると、ひきがえるは葛籠になっていた。

老婆の大きな顔が戸口から平太郎を見つめる。老婆の眉間に小柄（づか）を打ち込むが、痛そうな顔もしない。翌朝見ると眉間に打ち込んだはずの小柄が宙に浮き、しばらくして落ちた。



懇意にしている知人の頭から、赤子が二人、三人と這い出してくる。妖怪をおそれることはないが、懇意の知人に化けて出てくるのは困ったものだ

裃を着た四十歳くらいの武士が部屋に入ってくる。部屋の炉の灰が大きな頭になり、ミミズが飛び出してきた。壁には目玉の怪。武士曰く「拙者は山ン本五郎左衛門ともうす魔物。そなたのような勇気のある者は知らぬ。拙者をいつでも呼び出せる小槌を与えよう」と木槌を平太郎に手渡す。武士は多くの妖怪が担ぐかごに乗り、雲のかなたに消えていった。